仙 台 大 学 紀 要
Vol. 53, No.1: 35-49, 2021

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下における iPadを活用した学内介護実習の取り組みと学生の自己評価について

後藤　満枝[1)]　　堀江　竜弥[1)]　　福田　伸雄[1)]

1）仙台大学体育学部

仙台大学紀要
Vol. 53, No.1 35-49, 2021

実践研究

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下における iPad を活用した学内介護実習の取り組みと学生の自己評価について

後藤　満枝 [1)]　　堀江　竜弥 [1)]　　福田　伸雄 [1)]

1）仙台大学体育学部

Mitsue Goto[1)], Tatsuya Horie[1)], Nobuo Fukuda[1)] : The Care Practice Using iPad under the COVID-19 Pandemic and Students' Self-Evaluation of the Care Practice on Campus : Bulletin of Sendai University, 53 (1) : 35-49, September, 2021.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

Abstract: At Sendai University, the care practice for being qualified as a care worker was conducted on campus using iPad under the influence of the 2020 novel coronavirus infection (COVID-19). This care practice was conducted using a combination of the real-time type, which allows for two-way communication, and the on-demand type, which allows students to view videos recorded in advance by teachers and care staff at any time. According to the students' self-evaluation of the care practice, the majority of the students answered that they were able to learn "well" or "very well", to all the items. In the care work process, it is advantageous to be able to collect data on the activities of daily living (ADL) of the patient, especially by repeatedly watching and checking their physical movements based on the videos, which can lead to the development of the students' observation skills and insight. Although the students were not able to practice care work at a care facility, they were able to spend time and learn deeply about the care work process, which should be their specialty as a care worker. In the future, it is necessary to supplement the learning of daily living support skills.

KEYWORD online class, online video class, care work process
キーワード オンライン授業，オンデマンド授業，介護過程

Ⅰ．はじめに

2020年1月15日，国内で初めて新型コロナウイルス感染症（以下，COVID-19）による感染が確認された．このウイルス感染症は，人々に不安と脅威を抱かせるだけでなく，多くの命を奪うこととなり，現在も世界中で猛威を振るい続けている．2020年4月には政府による緊急事態宣言が発令された．その約1年後の2021年5月1日現在，宮城県では，宮城県・仙台市独自の緊急事態宣言が発令中であり，また新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき，政府による「まん延防止等重点措置」が2021年4月5日から5月11日まで実施される状況にある．

COVID-19は様々な分野に影響をもたらしているが，教育の分野も例外ではない．大学などでは，2020年よりオンライン授業を取り入れるなどの対応をしている．講義はオンラインで対応可能だが，実技，演習，実習など，実際に身体を動かし技術を習得するような科目については，オンライン授業で実施することは難しく，様々な工夫が必要である．とりわけ医療・看

護・介護の分野における資格取得のための学外実習については，相手先があって初めて成り立つものであり，学外での実習を相手先に受け入れてもらえるものか，また，学外での実習に学生を安全に参加させられる状況下にあるのかという見極めの難しさがある．

仙台大学では，2020年のCOVID-19の影響下において，介護福祉士資格取得のための介護実習を，iPadを用いて学内で行った．本稿では，その実習の概要を報告するとともに，学生の介護実習の自己評価から，学生の学びと今後の課題を検討することを目的とする．

Ⅱ．方法

仙台大学の例年の介護実習と2020年の介護実習の概要を示した上で，2020年の介護実習Ⅰ，介護実習Ⅱ，介護実習Ⅲの各実習段階終了時に実施した学生の実習自己評価の結果を単純集計して示す．

1．仙台大学の例年の介護実習について

1）実習の目的・ねらい

仙台大学では平成7年より介護福祉士養成を行っている．介護福祉士教育においては1850時間以上の指定された学修のうち，450時間を介護実習に充てることとなっている．例年，2年次には「介護実習Ⅰ」（8～9月）を12日間（96時間），3年次には「介護実習Ⅱ」（5～6月）と「介護実習Ⅲ」（8～9月）を23日間（184時間）ずつ学外の実習施設で経験する．本学の実習の概要については，介護実習要項の中で以下のように示している（大山ほか，2020）．

本学の介護実習Ⅰは，「利用者の暮らしや住まい等の日常生活を理解し，多様な介護サービスについて理解を深める」ことを目的・ねらいとしており，「利用者の生活の場であるさまざまな介護場面から，日常生活の実際，利用者の全人的な理解について学ぶ」実習である．到達目標としては，「利用者の環境を理解し，家族とのかかわりを通したコミュニケーションの実践・多職種協働・安全安楽な介護技術を確認できる能力が身につく.」としている．

介護実習Ⅱは，「障害の有無や年齢にかかわらず利用者が，尊厳を持って暮らしを確保することの重要性を理解する．介護過程の展開について学ぶ.」ことを目的・ねらいとしており，「利用者を担当し，一人ひとりの個性や生活リズム・ニーズを尊重した個別ケアに留意し介護過程の展開について学ぶ」実習である．到達目標は，「自立支援を視点とした利用者の介護過程が展開できる.」としている．

介護実習Ⅲでは，介護実習Ⅱの目的・ねらいに加え，「終末期を迎えることの重要性を理解する」ことを目的・ねらいとして設定している．介護実習Ⅱの内容に加え，「終末期の看取りまで，利用者の状況や変化に対応できる介護過程の展開と実践的能力について学ぶ」実習である．到達目標は，「施設・地域を通じて，終末期までの介護過程が展開でき，汎用できる介護スキルについて考察・評価する能力が身につく.」としている．

2）実習段階による施設種別と実習内容・方法

介護実習Ⅰでは，認知症対応型共同生活介護（グループホーム）または小規模多機能型居宅介護にて実際に利用者とのコミュニケーションや関わりを通して実習施設や利用者の理解，日常生活支援技術，学生個々に異なる担当利用者1名の情報収集とフェイスシート記録の方法などについて学ぶ．実習施設の概要については調べたり職員に確認したりしながら所定のシートに必要事項を記入する．

介護実習Ⅱと介護実習Ⅲでは，介護老人福祉施設，介護老人保健施設，障害者支援施設の中から実習施設を選択し，介護実習Ⅰと同様，実習施設や利用者の理解，日常生活支援技術の学習に加え，学生個々が利用者1名を受け持ち，利用者の情報収集，アセスメント，介護計画の立案などの介護過程の展開を行うことが最大の特徴である．同時に，担当利用者のフェイスシート，アセスメントシート，介護計画表などの記録の方法についても

学ぶ．さらにこれに加え，介護実習Ⅲでは立案した介護計画に基づき担当利用者に介護を実践し，実践結果から介護計画を評価するため，経過記録と評価の記録についても学ぶほか，実習期間中に夜勤実習を1回行い，夜間・早朝の介護業務を体験するという特徴がある．

どの実習段階においても,1日8時間の実習のうち1時間程度は実習日誌等の記録時間であり，それ以外の7時間程度の時間は利用者への日常生活支援と利用者とのコミュニケーションや観察を通した情報収集の時間である．日常生活支援の過程では，職員の実際の支援内容・方法を観察したり職員の指導の下で支援技術を実践したりしながら学習する．

２．2020年の介護実習について

１）学外実習から学内実習への移行

仙台大学では，COVID-19の影響により，2020年は5月11日から前期授業開始となった．例年，5月の大型連休明けから介護実習Ⅱが開始されるため，4月に実習事前指導の時間が確保できないことは大きな混乱を招いた．実習受け入れ状況については，「受け入れ可能」という施設も一部あった半面，「県内の感染状況の動向によっては受け入れ不可」,「今年度は実習受け入れ不可」という施設も少なくなかった．実習時期を少し後にずらしての実施も7月まで検討したが，感染者数の減少がみられなかった．これ以上の実習時期延期は，他の養成校の実習時期との重複や，他の授業への影響もあり困難であった．学生や実習施設利用者，職員の安全性も考慮し，介護実習Ⅱについては8月末からの実施を決定し，学内実習に切り替えて行うこととした．

なお，学内実習に切り替えることについての根拠文書は，文部科学省・厚生労働省からの事務連絡文書（令和2年2月28日付，令和2年6月1日付）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について」である．この文書で以下のように示されている．「実習施設の変更を検討したにもかかわらず，実習施設の確保が困難である場合には，年度をまたいで実習を行っても差し支えないこと．なお，これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合，実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより，必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと.」とある（文部科学省・厚生労働省，2020）．

２）学内実習の概要

仙台大学では，2020年から通信可能なiPadを学生に貸与し，オンライン授業の際にはGoogle Classroom上で展開している．介護実習も同様に，Google Classroomを運用しながら行うこととし，施設からも了承を得た．なお，例年と同様，この実習で知り得た利用者や施設の情報などは実習中も実習後も一切漏洩しないよう学生に注意し，誓約書をとった．

（１）介護実習Ⅰの概要

①対象学生：

対象学生は，2年生29名であった．

②実習期間：

実習期間は，2020年8月17日（月）～8月29日（土）までの日曜日を除く12日間（各日8時間）であった．

③実習施設：

主な実習施設は，認知症対応型共同生活介護（グループホーム）1施設である．1日のみ小規模多機能型居宅介護1施設について学ぶ内容の実習を取り入れた．

④実習の概要：

学生は大学に集合し，教室から対面とオンライン形式を組み合わせながら実習に参加した．Google Meetを用いて実習指導者から施設の概要について説明を受け，所定のシートに記入した．また，Google Classroom上で閲覧し利用者の観察を通して情報収集ができるよう，担当利用者1名（学生全員共通）の生活の様子などを撮影した画像や動画を専用のフォルダで共有した．得られた情報はフェイスシートに記入し，Google Classroom上

で学生，教員，実習指導者が閲覧できるようにした．学生への指導に関して教員は対面とオンラインで，実習指導者はオンライン上で学生の記録物を確認し助言・指導を行った．その日の実習記録については，例年は手書きだったものを，今回はGoogleドキュメントで作成した実習日誌に入力することとした．通常実習指導者が記載するコメント欄には，毎日実習後に担当教員がPCでコメントを入力し，学生，教員，実習指導者それぞれがGoogle Classroom上で確認ができるようにした．今回の実習では利用者に対しての直接の支援ができず，日常生活支援技術については，教員の指導の下，感染防止用マスク，アイガードを着用して演習を行った．実習の半数程度の日数でかつ各半日程度の時間を充てた．実施内容は，学内では感染症予防対策の講義・演習や学生同士での基本的なベッドメイキングの演習，学外に実際に出かける移動支援や買い物支援の演習もあり，学内及び自宅学習も併用しグループホームでの提供を想定したおやつづくりと動画作成などを行った．

（2）介護実習Ⅱの概要

①対象学生：

対象学生は，3年生21名であった．

②実習期間：

実習期間は，2020年8月31日（月）～9月22日（火），及び10月3日，10月17日，10月24日（各土曜日）の日曜日を除く計23日間（各日8時間）であった．

③実習施設：

実習施設は，介護老人保健施設（1施設）であった．

④実習の概要：

基本的には介護実習Ⅰと同じ要領で実施した．介護実習Ⅱでの大きな課題の1つである介護過程の展開については，学生個々に異なる利用者を受け持つことは難しいため，学生全員が共通の利用者を1名受け持ち，情報収集から介護計画の立案まで行った．フェイスシート，アセスメントシート，介護計画表については，教員と実習指導者の指導を対面あるいはGoogle Meetを用いて受けながら作成し，作成した資料はGoogle Classroom上で学生，教員，実習指導者が閲覧できるようにした．カンファレンスは，対面での学内カンファレンスと実習指導者を交えたオンラインでのカンファレンスを行った．日常生活支援技術については，7日間程度のうち各半日程度の時間を充てた．内容としては，学内では感染症予防対策の講義・演習，実際の援助場面を想定した臥床する人がいる中でのベッドメイキング，移動支援，また外出支援として実際に学外へ車椅子で出かける演習も学生同士で行った．それらの生活支援技術の演習以外は基本的に介護過程の展開に必要な学習であった．介護実習Ⅰでは実現できなかった担当利用者とのコミュニケーションもGoogle Meetを用いて行い，観察だけでなくコミュニケーションを通しての情報収集も行った．

（3）介護実習Ⅲ

①対象学生：

対象学生は，介護実習Ⅱの対象学生と同一の3年生21名であった．

②実習期間：

実習期間は，2020年11月9日（月）～2020年12月4日（金）までの日曜日を除く計23日間（各日8時間）であった．

③実習施設：

実習施設は，介護老人福祉施設（1施設）であった．

④実習の概要：

基本的には介護実習Ⅰ，Ⅱと同じ要領で実施した．介護過程の展開についても同様で，学生全員が共通の利用者を1名受け持ち，情報収集から介護計画の立案，それに加えて実施，評価まで行った．なお，立案した介護計画は，通常であれば学生個々に実践するところだが，今回は学生の3つのグループの中から各1名を実習指

導者に選定してもらい，途中からグループで1つの介護計画の修正や評価を行った．介護計画は実習指導者に実践してもらい，その様子を撮影した動画をGoogle Classroom上で共有し，学生はその動画をもとに観察し，経過記録および評価を記録した．

また，今回の実習では担当利用者の家族の協力なしには実践できない介護計画を，実際に家族の協力を受け実践してもらった．実践過程の様子を撮影した動画の視聴から家族との連携等，実践過程を振り返った．生活支援技術については実習の中に直接演習を取り入れることはなかったが，実習指導者により終末期ケアに関する講義を受けた．さらに，例年介護実習Ⅲの中で1回設けている夕方から翌早朝までの夜勤実習については，今回オンライン上で実施し，Google Meetを用いて夜間帯の施設，職員の様子や担当利用者の様子を確認した．仮眠は通常の実習と同様，深夜に2時間程度とった．夜勤実習中，実習指導者に質問をする時間を設けるなどした．

３．実習自己評価

学内実習における効果がどのようなものか把握することを目的に，各実習段階において，学生に個人情報は求めないかたちで実習の自己評価を依頼した．あらかじめ口頭で趣旨を説明した上で協力を依頼し，同意を得て実施した．研究目的で実施する実習として位置づいていないため倫理審査の承認を得ていないが，執筆者を含む介護福祉士養成に携わる教員3名が調査にあたり，以下の手続きを踏まえることで倫理的妥当性の担保に努めた．

①本調査の回答によって教育に不利益が生じないこと
②回答は学生の自由意思に基づいていること
③学生個人が特定できないようメールアドレスを収集しないこと
④誰のデータであるか分からないよう，集計した結果のみを使用すること

各実習段階における自己評価の実施方法については以下で述べる．

１）介護実習Ⅰ

（１）対象学生：

対象学生は，2年生29名であった．

（２）調査方法：

Google Formを活用し，介護実習Ⅰ最終日に，介護実習Ⅰの自己評価について入力し，提出するよう協力を求めた．調査項目は，①iPadを用いた実習で学ぶことができたものについて（オンライン・オンデマンドで学べたもの），②学内・自宅での演習によって学ぶことができたものについて，③実習の自己評価点数（100点満点），④介護実習Ⅰ全体の学び，⑤実習を通して自分に感じた課題であった．①と②についてはあらかじめ項目を挙げ，「よく学べた」，「学べた」，「あまり学べなかった」，「学べなかった」の4件法で回答するよう求めた．③～⑤については自由記述形式とした．

（３）調査時期：

調査は，2020年8月29日に実施した．

２）介護実習Ⅱ

（１）対象学生：

対象学生は，3年生21名であった．

（２）調査方法：

介護実習Ⅰと同様，Google Formを活用し，介護実習Ⅱ最終日に，介護実習Ⅱの自己評価について入力し，提出するよう協力を求めた．調査内容は介護実習Ⅰと同様であるが，調査項目については実習内容と整合性がとれるように変更を加え設定した．

（３）調査時期：

調査は，2020年10月24日に実施した．

３）介護実習Ⅲ

（１）対象学生：

対象学生は，3年生21名であった．

（２）調査方法：

介護実習Ⅰ及び介護実習Ⅱと同様，Google Formを活用し，介護実習Ⅲの最終日に，介護実習Ⅲの自己評価について入力

し，提出するよう協力を求めた．調査項目は，①iPadを用いた実習で学ぶことができたものについて（オンライン・オンデマンドで学べたもの），②学内・自宅での演習によって学ぶことができたものについて，③実習の自己評価点数（100点満点），④実習で印象に残ったこと，⑤実習で辛かったこと，⑥介護実習Ⅲ全体の学び，⑦実習を通して自分に感じた課題であった．①と②についてはあらかじめ項目を挙げ，「よく学べた」，「学べた」，「あまり学べなかった」，「学べなかった」の4件法で回答するよう求めた．③～⑦については自由記述形式とした．

（3）調査時期：

調査は，2020年12月4日に実施した．

Ⅲ．結果

1．介護実習Ⅰ

1）回収率

29名全員から回答が得られた（回収率100%）．内訳は，男性19名，女性10名である．

2）iPadを用いた実習で学ぶことができたもの（オンライン・オンデマンドで学べたもの）について

［グループホームの理解］について「よく学べた」は20名（69.0%），「学べた」は9名（31.0%），［施設に勤務する職員の理解］について「よく学べた」は21名（72.4%），「学べた」は8名（27.6%），［フェイスシートの記録］について「よく学べた」は23名（79.3%），「学べた」は6名（20.7%）であった．以下，図1に示す．

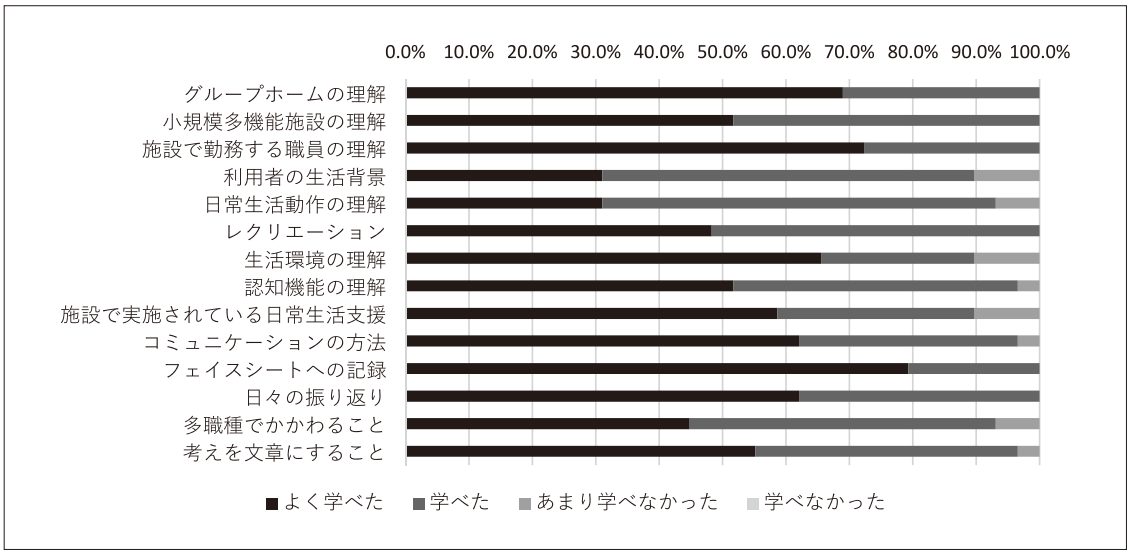

図1　＜介護実習Ⅰ＞iPadを用いた実習で学べたもの（オンライン・オンデマンドで学べたものを含む）

3）学内・自宅での演習によって学ぶことができたものについて

［移動支援］について「よく学べた」は18名（62.1%），「学べた」は11名（37.9%），［買い物支援］について「よく学べた」は22名（75.9%），「学べた」は7名（24.1%）であった．［ベッドメイキング］について「よく学べた」は，25名（86.2%），「学べた」は4名（13.8%）であった．以下，図2に示す．

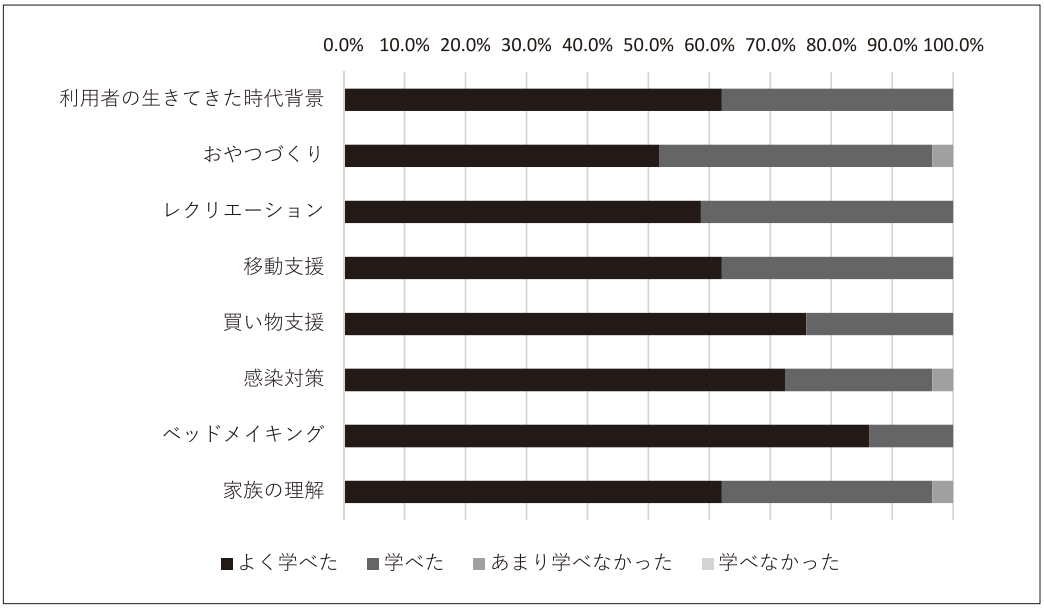

図２　＜介護実習Ⅰ＞学内・自宅での演習によって学べたもの

４）実習の自己評価点数（100点満点）について

実習の自己評価が100点満点で何点かを尋ねたところ，平均点は82.7±8.2点（最小値60，最大値95）であった．

５）介護実習Ⅰ全体の学びについて

介護実習Ⅰの全体の学びとしては以下のような回答が得られた．「遠隔の実習となったが施設の概要，職員の業務内容，利用者の様子などを知る事ができた．」，「介護実習Ⅰでは特に，利用者とその家族そして，それを支える介護職それぞれの思いについて学ぶことができました．」，「教科書の知識だけでなく，実際に自分が体験をして感じたことや気付いたことがたくさんあった．特に車椅子での移動や認知者の方との会話を学ぶことができた．」．また，「施設の温かい雰囲気であったり，そこで働く職員の方々の姿勢を学ぶことができ，介護の仕事に対してのイメージが変わった．」，「今まで介護に実感が湧かず遠い存在だと感じていたが実習を通して介護の魅力を学べた．」，「介護福祉士はとても楽しくやりがいを身に染みて感じることの出来る職業である．」など，介護に対するイメージが良い方に変化した様子がうかがえる回答も多く得られた．

６）実習を通して自分に感じた課題について

実習を通して自分に感じた課題は何かという設問に対しては，「レクリエーションなど人前で何かをやる時に堂々と発言することができていないことが課題だと感じました．」という回答や「積極性」についての回答などが得られた．また，「文章力と，介護のワードをあまり覚えていなかったので勉強不足を感じた．」や「言葉を文章にするということが，自分の1番の課題だったと感じています．語彙力が乏しく，自分の感じたこと，思ったことを素直に表現できなかったと思いました．」など，文章力や伝え方についての回答も得られた．さらに，「自分で物事について考えて行動できればいいと思った．」や「物事をただ見たり，聞いたりするのではなく，さまざまな視点から見ること．」など，「よく考えること」や「広い視点を持つこと」の必要性についての回答が得られた．

２．介護実習Ⅱ

１）回収率

21名全員から回答が得られた（回収率100％）．内訳は，男性12名，女性9名である．

2）iPadを用いた実習で学ぶことができたもの（オンライン・オンデマンドで学べたもの）について

［介護老人保健施設の理解］について「よく学べた」は9名（42.9％），「学べた」は12名（57.1％）であった．［フェイスシートへの記録］については，「よく学べた」が14名（66.7%），「学べた」が5名（23.8%），「あまり学べなかった」が2名（9.5%），［情報収集］については，「よく学べた」が11名（52.4%），「学べた」が9名（42.9%），「あまり学べなかった」が1名（4.8%）であった．［アセスメント］については，「よく学べた」が11（52.4%），「学べた」が8名（38.1%），「あまり学べなかった」が2名（9.5%），［計画立案］については，「よく学べた」が11名（52.4%），「学べた」が8名（38.1%），「あまり学べなかった」が2名（9.5%）であった．以下，図3に示す．

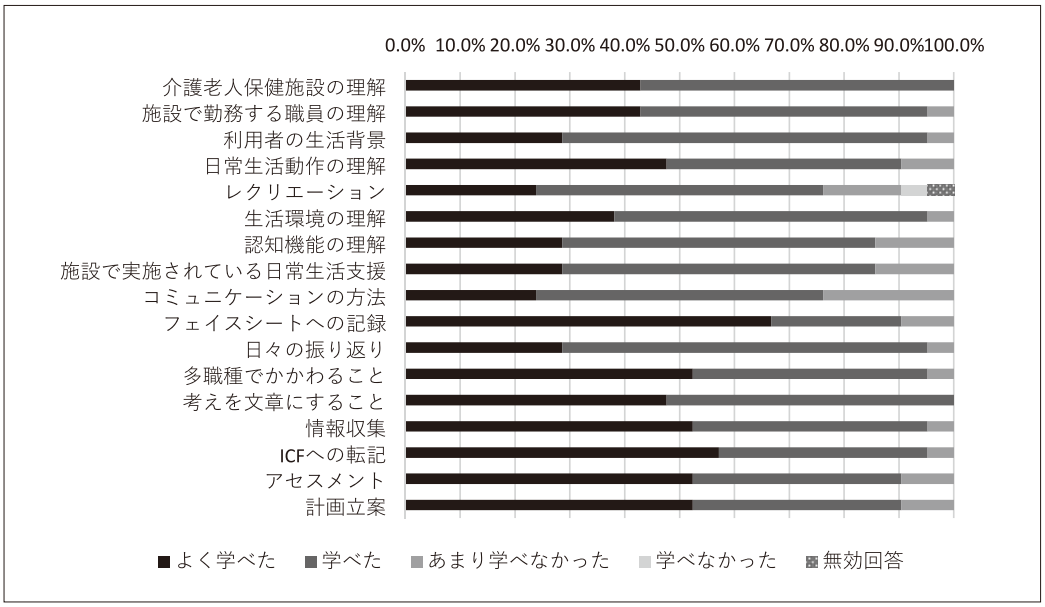

図3　＜介護実習Ⅱ＞iPadを用いた実習で学べたもの（オンライン・オンデマンドで学べたものを含む）

3）学内・自宅での演習によって学ぶことができたものについて

［移動支援］と［外出支援］について「よく学べた」は共に10名（47.6%），「学べた」も共に11名（52.4%）であった．［ベッドメイキング］について「よく学べた」は13名（61.9%），「学べた」は8名（38.1%）であった．以下，図4に示す．

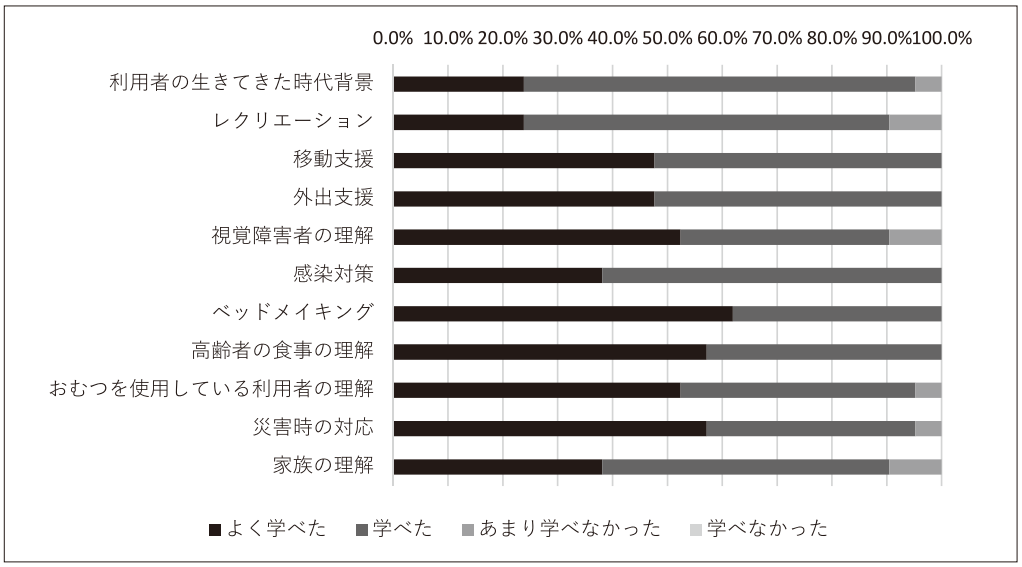

図４　＜介護実習Ⅱ＞学内・自宅での演習によって学べたもの

４）実習の自己評価点数（100点満点）について

実習の自己評価が100点満点で何点かを尋ねたところ，平均点は76.0±8.0点（最小値60，最大値90）であった．

５）介護実習Ⅱ全体の学びについて

介護実習Ⅱの全体の学びとしては以下のような回答が得られた．「情報収集の重要性です．情報収集が基礎となりアセスメント，介護計画立案に繋がっていくからです．」，「利用者の言動の裏に隠されたものを汲み取り，客観視とPDCAサイクルを回し続けていくことが重要．」，「介護老人保健施設を利用する利用者と働く介護職員の目的と他職種連携．情報収集の難しさ．」，「介護計画を作成するにあたって，利用者さん，家族を含め，他職種との連携の重要性を学んだ．利用者本意に重きをおくこと．」などである．情報収集の難しさと重要性，他職種との連携の重要性，そして，これらが介護計画を作成するために必要なものであるという回答が多く得られた．

６）実習を通して自分に感じた課題について

実習を通して自分に感じた課題は何かという設問に対しては，「利用者の視点で考えること」や「利用者思いで考えてニーズに応えられるようになること」，「利用者の視点からも物事を考え支援する．」など，利用者本位の支援を考えることの必要性についての回答が得られた．また，「計画立案」や「介護計画を立案するうえで，発想が少なかったこと．初めに立案した介護計画がリハビリになってしまったこと．」，「分かりやすく実践しやすい介護計画の立案が実習を通して感じた課題です．」，「介護計画立案に関してより共有しやすい支援方法の立案」など，介護計画立案についての課題が回答として挙げられた．さらに，「文章を簡潔に分かりやすくまとめる．」，「文章力，表現力，実施力，解説力」，「相手に伝える力」など，文章表現力，記録についての回答も得られた．

３．介護実習Ⅲ

１）回収率

21名全員から回答が得られた（回収率100％）．内訳は，男性12名，女性9名である．

２）iPadを用いた実習で学ぶことができたもの（オンライン・オンデマンドで学べたもの）について

［介護老人福祉施設の理解］について「よく学べた」は9名（42.9％），「学べた」は12名（57.1％）であった．［フェイスシートへの記録］について「よく学べた」は15名

(71.4%)，「学べた」は6名（28.6%），［情報収集］について「よく学べた」は15名（71.4%），「学べた」は6名（28.6%）であった．［アセスメント］について「よく学べた」は11（52.4%），「学べた」は10名（47.6%），［計画立案］について「よく学べた」は10名（47.6%），「学べた」は11名（52.4%）であった．［計画実施］については，「よく学べた」が12名（57.1%），「学べた」が7名（33.3%）などであった．［計画評価］について「よく学べた」は10名（47.6%），「学べた」は11名（52.4%）であった．以下，図5に示す．

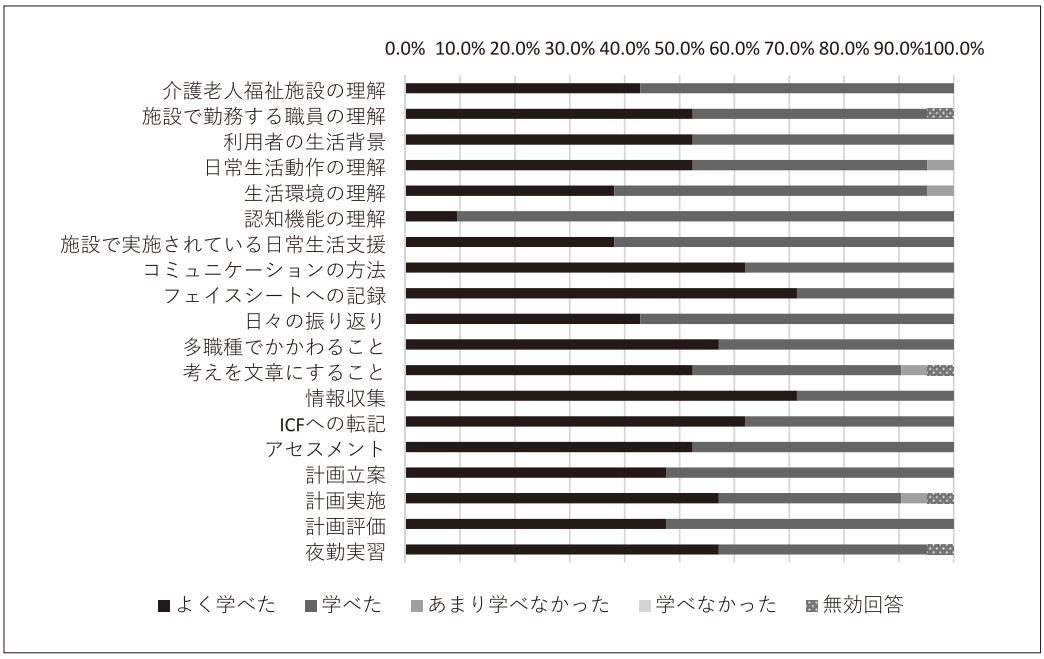

図５　＜介護実習Ⅲ＞ iPad を用いた実習で学べたもの（オンライン・オンデマンドで学べたものを含む）

３）実習の自己評価点数（100点満点）について

実習の自己評価が100点満点で何点かを尋ねたところ，平均点は81.1±7.2点（最小値65，最大値100）であった．

４）実習で印象に残っていること

実習で印象に残ったこととしては，「夜勤実習」に関する回答（10件）が最も多く，「最後に行った介護計画のＡ様と奥様の食事シーン」に関する回答（9件），「終末期ケア」に関する回答（2件）などが得られた．

５）実習で辛かったこと

実習で辛かったこととしては「夜勤実習」に関する回答（9件）が最も多く，特に「朝まで起きていることが辛かった」との内容が多かった．また，「アセスメント」に関する内容（6件），「個別援助計画（介護計画）」に関する内容(6件)，「自分の考えを文章にすること」に関する内容（3件），「評価」に関する内容(2件)などの回答が得られた．

６）介護実習Ⅲ全体の学びについて

介護実習Ⅲ全体の学びとしては，「介護計画の立案」に関する内容や「介護計画の評価」に関する内容，「介護の難しさ，奥深さ，やりがい」に関する内容などの回答が得られた．特に「介護計画の立案」については，「利用者のことを考えて計画を作ること．自己満足だけにならないようにする．」や，「介護計画はその人の真のニーズに合わせて計画しないと意味がない」など，利用者個々のニーズに応じた介護計画立案の必要性についての回答も得られた．また，「介護計画の評価」については，「計画を実施して終わりではなく，結果からどう変えていくのか続いていくもの

なのだということが理解できました.」「評価が今後の援助計画実施に繋がるということ」など，評価の必要性について理解できたという回答が得られた.

さらに,「介護の難しさ，奥深さ，やりがい」については,「介護士としての喜びや辛いことなど実習や演習というよりは，より現場で働くと考えた時に大切なことが学べた.」や,「介護という仕事がどれだけ自分の人生，また，様々な人の人生の中にあり，その考えを常に持ち続けることの難しさなどについて学んだ．とても奥が深く面白いものだとは思った.」,「介護職は一人一人に向き合うことが大切で大変だけど，利用者や利用者の家族が喜んでいる姿見を見ると良かったなと思えるし，それが介護職の魅力なのだということを学べた.」などの回答も得られた.「介護福祉士が他の職種にはできない，人に寄り添い，その人らしさを引き出すこと，のびのびと生活するにはどんな支援が必要なのか，生活に豊かさを提供する能力を身につけること.終末期ケアでは，最期まで安らかに，楽しく生活できるように，何がその人にとって今一番したいこと，やりたいことなのか汲み取り，分析する能力や，やりたいことしたいことをサポートできるのは，日常生活に一番寄り添っている介護職なのだと気づき，どのように介護として関わっていくのかを学べました.」と，中にはこのような回答も挙げられた.

7）実習を通して自分に感じた課題

実習を通して自分に感じた課題としては，特に,「文章力」に関する内容（13件）が多く，そのほか,「洞察力，観察力」に関する内容（3件),「常に疑問を持つこと」（2件）などの回答が得られた.

Ⅳ．考察

1．情報収集とフェイスシートの記録について

当初，介護実習を学内実習に切り替えて行うことは単調な実習内容になりかねず，学生がどこまで集中して取り組めるのか，また実習施設の様子を肌で感じることができないため，どれだけの学びを得ることができるものかと懸念された．しかし，他の養成校でも施設見学を含めた学内実習（棟方，2021）や，Zoomを利用した実習（柊崎ほか，2021；木村，2021），Skypeを利用した実習（上村，2021）などのオンライン実習を展開するなど，それぞれに工夫しながら学内実習に切り替えたという報告もあった．実際に，本学の場合は，学生の実習自己評価からみると，どの項目もほとんどが「よく学べた」または「学べた」という回答であった.特に「iPadを用いた実習で学ぶことができたもの」(オンライン・オンデマンドで学べたもの）としては，［フェイスシートへの記録］について「よく学べた」が，介護実習Ⅰで79.3%，介護実習Ⅱでは66.7%，介護実習Ⅲでは［情報収集］と共に71.4%と，どの実習段階でも共通して最も高い回答率であった．フェイスシートの中でも特にADL（Activities of Daily Living；日常生活動作）については，利用者の身体の動きや表情などがわかる動画を何度も見直し，詳細な状況まで観察を行った．そして，オンライン上での実習指導者からの助言・指導も受け，加筆修正をしながら完成度を高めた．特に介護実習Ⅱや介護実習Ⅲと異なり，介護実習Ⅰでは初めての実習で担当利用者のフェイスシートをまとめたため，その分，実習指導者から記録の書き方について指摘を受けることも多く，学びにつながったものと考えられる．通常の介護実習と異なり，今回はiPadを活用することで事前に撮影しておいた動画を何度も繰り返し視聴可能な状況であったため，後から再度確認した場合に新たな気づきや物の見方ができる可能性があると考えられた．実際に,「物事をただ見たり，聞いたりするのではなく，さまざまな視点から見ること.」の必要性を感じ，実習後にそれを課題として挙げている学生もいた．画像や動画はその都度教員間で協議し判断して学生と共有したが，どの情報をいつのタイミングで共有するのがよいのかは非常に重要な点であった．初めからすべての情報を提供するのではなく，1つの写真や記録物の画像から利用者の何が読み取れるのかを学生に考えさせることを意

識し，段階を踏みながら動画を共有していったことで，学生の観察力や洞察力を養うことにつなげられたと考えられる．

他の養成校のオンライン実習において画面越しに利用者とコミュニケーションを通して情報収集を実施しているケース（上村，2021）は一部あったものの，利用者のADLや生活環境等，利用者の様々な場面を撮影し，録画を視聴し情報収集を行っているケースはこれまで本学以外には見当たらなかった．そのため，今回本学で検討し実施したこの情報収集の方法は先駆的であり，今後も踏襲することで，今後COVID-19の状況によっては，大学に集合せずに自宅からオンライン実習の参加に切り替えることも可能になると考えられた．また事前の撮影等に時間を要するものの，録画した映像を通常の「介護過程」の授業における情報収集の学習として活用することも十分可能であり，利用者や実習指導者の協力が得られれば，より実践的な学びにつながると考えられる．

２．実習施設の理解について

各実習段階において実習施設についての理解もできたことが自己評価から読み取れる．介護実習Ⅰでは「グループホームの理解」，介護実習Ⅱでは「介護老人保健施設の理解」，介護実習Ⅲでは「介護老人福祉施設の理解」について「よく学べた」「学べた」を合わせるとどの段階の実習でも100％であった．どの実習段階でも実習施設の概要を記録にまとめる上で，実習施設のパンフレット，資料を確認するだけでなく，実習施設の動画や，実習指導者からの施設の概要についてオンライン上で説明を受けることができた．学生は実習指導者に疑問に思ったことをGoogle Formに入力またはGoogle Meetを通して質問し，確認することができたため，実習施設について十分に理解ができたものと考えられる．

３．生活支援技術の学習について

「学内・自宅での演習によって学べたもの」としては，［ベッドメイキング］について「よく学べた」が介護実習Ⅰで86.2％，介護実習Ⅱで61.9％と，共通して最も多い回答であった．このベッドメイキングは，初めに基本的技術の復習を行い，次にベッドに臥床している人がいる状態で行った．これまでの生活支援技術の授業では，臥床している人がいない状態での基本的なベッドメイキングを演習で行ってきたため，今回はより実践的な内容として学ぶことができたものと考えられる．また，特に介護実習Ⅰでは，「学内・自宅での演習によって学べたもの」として，ほとんどの項目で「よく学べた」との回答が6割以上であった．単に講義を受けるだけでなく，［ベッドメイキング］と同様に［買い物支援］や［移動支援］など，生活支援技術について身体を動かし実践的に学ぶ内容については，座学が多くなりがちな実習の中でも主体的に学ぶことができる実習の一つであったと推察される．ただし，オンライン実習では，実際に施設の利用者を対象とした生活支援技術の実践ができないという欠点があったため，今後学内演習や実習施設での生活支援技術の補完について，何らかの対応策を考えていく必要があると考えられる．

４．介護過程の展開について

介護実習Ⅱと介護実習Ⅲでは同一の学生が実習を行ったが，介護実習Ⅲではほとんどの設問で「よく学べた」との回答が5割程度以上占めており，「あまり学べなかった」との回答はほとんど見られなかった．1人の担当利用者について情報収集から介護計画の評価までの一連の介護過程を展開し，夜勤実習も経験し，より一層深く多くのことを学ぶことができた実習になったと推察される．

通常の実習では，学生個々に異なる担当利用者を1人受け持ち介護過程の展開を行うが，今回の実習では学生全員が共通の1人の利用者を受け持ち，その方の介護過程を展開した．学生が立案した介護計画は個々に異なる内容であった．それは，同じ情報を把握していても異なる視点で利用者を捉えており，アセスメントの仕方が異なるためであった．学生は他の学生の意見を聞くことができ，周りに仲間がいることでの安心感や，質問したいときにいつでも質問で

きる教員が教室にいるという安心感があったと考えられる．それが今回の学内実習の利点の一つでもある．吉岡（2021）は，「学生がお互いに利用者の情報に関する気づきを話し合うことで，一人で行う情報収集よりも違った視点がもて学びが深まるのではないか」と述べている．本学の今回の実習においても，利用者の介護過程に関する学生同士の話し合いを通して，自分と他の学生との視点の違いに気づくと同時に，より人に伝わりやすい文章の表現方法などについても，他の学生から学ぶことがあったと考えられる．また，通常の学外実習と異なり，学内実習では教員が学生の進捗状況をその都度リアルタイムで確認し，学生個々が何につまずいているのかを把握することができた．通常の実習巡回指導時よりも時間をかけ丁寧に介護過程の指導ができ，学生と教員双方にとって利点であった．介護過程の学生の記録物を電子化することでGoogle Classroom上で記録物の管理がしやすいこと，教員，実習指導者，学生がいつでも閲覧できる点も利点であった．ただし，学内実習においては施設の実習指導者は常時学生とオンラインで関わるのではなく，通常の施設の介護業務との兼ね合いによりオンラインで介入できる時間に制約があった．その分，教員と実習指導者間の事前の打ち合わせに時間を要することは勿論のこと，通常の実習に比べ教員の実習全体の拘束時間が長く，負担が大きいという欠点もある．

５．各実習段階における全体の学びについて

それぞれの実習段階における全体の学びとしては，介護実習Ⅰでは実際に実習施設に行くことはできなかったものの，「iPadを用いた実習で学べたもの」や，「学内・自宅での演習によって学べたもの」などについての回答から，施設の概要や職員の業務内容，利用者の様子，家族の気持ちなど，介護実習Ⅰで学ぶべき基本的な内容について学ぶことができたことがうかがえる．また，実習を通して施設の温かい雰囲気を感じることができたとの意見もあった．介護の魅力，やりがいを見出すこと，介護に対するイメージが良い方向へと変化したことなどから，「介護」について深く学ぶ実習になったことがうかがえた．

介護実習Ⅱと介護実習Ⅲでは，介護過程の展開が大きな課題であったため，それについての回答が多くを占めていた．特に介護実習Ⅱでは，情報収集の難しさと重要性，介護計画を作成する上で他職種との連携，利用者本位が重要であることを認識したことがうかがえる．介護実習Ⅱと同様，介護実習Ⅲでも担当利用者の介護計画立案の課題があったが，利用者個々のニーズに応じた介護計画の必要性を再認識したことが推察される．また，介護実習Ⅱでは行わなかった介護計画の評価についても，その必要性を理解することができたことがうかがえる．利用者の家族の協力もあり，家族との連携や，そこに関わる他職種との連携の重要性も学ぶことができたと推察される．そして，終末期ケアについての学びもあり，まさに「終末期の看取りまで，利用者の状況や変化に対応できる介護過程の展開と実践的能力について学ぶ」ことができた実習であったと言える．介護実習Ⅲでは，介護について「とても奥が深く面白い」，「利用者や利用者の家族が喜んでいる姿を見ると良かったなと思えるし，それが介護職の魅力」などと学生は学びを振り返っている．さらに，「他の職種にはできない，人に寄り添い，その人らしさを引き出すこと，のびのびと生活するにはどんな支援が必要なのか，生活に豊かさを提供する能力を身につけること.」，「終末期ケアでは，最期まで安らかに，楽しく生活できるように，何がその人にとって今一番したいこと，やりたいことなのか汲み取り，分析する能力や，やりたいことしたいことをサポートできるのは，日常生活に一番寄り添っている介護職なのだ」と，介護福祉士や介護職の仕事，役割について深く学びや気づきを得た学生もいた．介護実習Ⅲを終えると，就職活動の時期が間もなく到来する．特に最後の実習である介護実習Ⅲが就職先の選択にもたらす影響は大きい．そのため，介護実習Ⅲをどのような実習で終えるか，どれだけ心に響く学びが得られたかは学生の介護観にも影響を与える非常に重要なことである．そういう意味では，今回直接実習施設に行くことはでき

なかったものの，担当利用者や実習指導者から介護について非常に心に響く大きなものを得た実習となり，さらには介護の専門職としてのあり方を深く考えさせられるよい機会となったと推察される．

６．実習を通して学生が感じた課題について

実習を通して自分に感じた課題について，学生からは，介護実習Ⅰ，介護実習Ⅱ，介護実習Ⅲともに，文章力や表現力，考える力を養うこと，広い視点を持つことなどについての回答が多く得られた．とりわけ介護実習Ⅲでは，介護計画の評価まで行ったため記録をすることが多かったと思われる．実際，実習で辛かったこととして，「アセスメント」，「個別援助計画（介護計画）」，「評価」，「自分の考えを文章にすること」に関する内容などを挙げている．

介護は，よく「3K」と言われ，力仕事，体力のいる仕事と考えられているが，実際は，事あるごとに「記録する」ということを求められ，記録する力が必要とされる仕事でもある．記録するには，観察などを通して物事を客観的に正確に捉える力や，状況を適切に判断する力，文章に起こして表現する力が求められる．介護福祉士は，客観的で科学的な思考過程である「介護過程の展開」を通して，根拠に基づいた介護の実践を可能にし，利用者の自立支援，QOL（Quality of Life；生活の質）を展開する．いわば，介護福祉士の専門性は介護過程を展開できる能力であると言える．介護過程の目的である，利用者の自己実現を支援できるよう，学内の講義・演習に加え，学外の介護実習を通して学ぶことが今後も求められる．

Ⅴ．まとめ

2020年のCOVID-19の影響下におけるオンライン介護実習は，iPadを活用し，直接実習指導者や担当利用者とコミュニケーションを図ることのできるリアルタイム型と，あらかじめ録画しておいた動画をいつでも視聴できるオンデマンド型を組み合わせて学内で行った．学生の実習自己評価では，どの項目も「よく学べた」または「学べた」という回答がほとんどであった．介護実習において大きな課題の1つである介護過程の展開の中では，特に利用者のADLについて，動画を基に身体の動きや表情などを何度もくり返し視聴し確認しながら情報収集を行えるという点が利点であり，学生の観察力や洞察力を養うことにもつなげられた．フェイスシートへの記入についてもよく学べたことが明らかになった．実習施設に行っての実習はできなかったが，その分，介護福祉士としての専門性となる介護過程の展開の学習に時間をかけ深く学ぶことができた．今後は生活支援技術の学習を補完していく必要がある．

実践現場に行っての実習の重要性は多く指摘されているところではあるが，COVID-19の影響は，今後もしばらくは続くことが予測される．そのため，学内と学外での実習を組み合わせることや，さらに対面とオンライン（リアルタイム型，オンデマンド型）を組み合わせて実施していく対応は，今後も求められる可能性がある．また，今回のiPadを活用した介護実習は，今後自然災害等の突発的事項が発生した場合にも活用できるのではないかと考えられる．改善すべき点は改善し，備えていく必要がある．

最後に，今回の学内実習を通して，教員同士，または教員と実習指導者間の事前の綿密な打ち合わせや準備がより必要であると考えられた．通常の学外実習と異なり，これまでにない実習計画を一から創り上げていくことや，学生の学習の進度に応じてその都度柔軟に実習計画を変更して対応しなければならない難しさがある．これらのことから，いかに教員と実習指導者が連携を図れるかが鍵であり，教員の負担を軽減できるかが課題である．

謝辞

今回の実習にご協力いただきました，グループホーム ゆめみの杜，小規模多機能型居宅介護 杜の家ゆめみ，介護老人保健施設 丸森ロイヤルケアセンター，特別養護老人ホーム エコーが丘の担当利用者様とご家族様，そして実習指導者の皆様には，学生の実習のために貴重な時

間を割いていただき，介護における様々な学習の場を提供していただきましたこと，心より感謝申し上げます．また，実習に際してご支援いただきました学内の関係教職員の皆様にも，この場をお借りし，改めて感謝申し上げます．

文献

柊崎京子・松永美輝恵・藤江慎二・吉賀成子（2021）コロナ禍における介護実習の代替策―学生の動機づけを促進し，実践力を養う代替策の検討―．介護福祉教育，第 25 巻第 1 号（通巻第 48 号）:16-20

木村あい（2021）コロナ禍における介護福祉実習の現状とその取り組み．介護福祉教育，第 25 巻第 1 号（通巻第 48 号）:41-44

文部科学省・厚生労働省（2020）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について」（令和 2 年 2 月 28 日付事務連絡文書）

文部科学省・厚生労働省（2020）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について」（令和 2 年 6 月 1 日付事務連絡文書）

棟方ナナ子（2021）介護福祉士養成校における学内実習の一考察．介護福祉教育，第 25 巻第 1 号（通巻第 48 号）:7-12

大山さく子・後藤満枝・篠原真弓・堀江竜弥・福田伸雄編（2020）令和 2 年度介護実習要項．仙台大学体育学部健康福祉学科，p.4

上村友希（2021）Skype を利用した介護実習の取り組みについて．介護福祉教育，第 25 巻第 1 号（通巻第 48 号）:49-52

吉岡俊昭（2021）web を活用した介護実習と今後を見据えた学内実習の取り組み．介護福祉教育，第 25 巻第 1 号（通巻第 48 号）:45-48

（2021年　5月31日受付
2021年　8月10日受理）